

“和紙デニム”で

水擦り製法という独自技術で擦った和紙糸を緯糸に使ったデニムを手掛ける備後撚糸（福山市、光成猛社長）は、アパレルのジーンズ企画、服飾製品での採用が本格化している。生地は通常のデニムに比べ7〜8割高いが、付加価値創出を狙い差別化商品の開発を進めるアパレル企業の要望に沿う新たな素材として、同社では提案に弾みをつけている。年明けからは、ポリウレタンを混ぜたストレッチデニムの試織も始めた。

備後撚糸

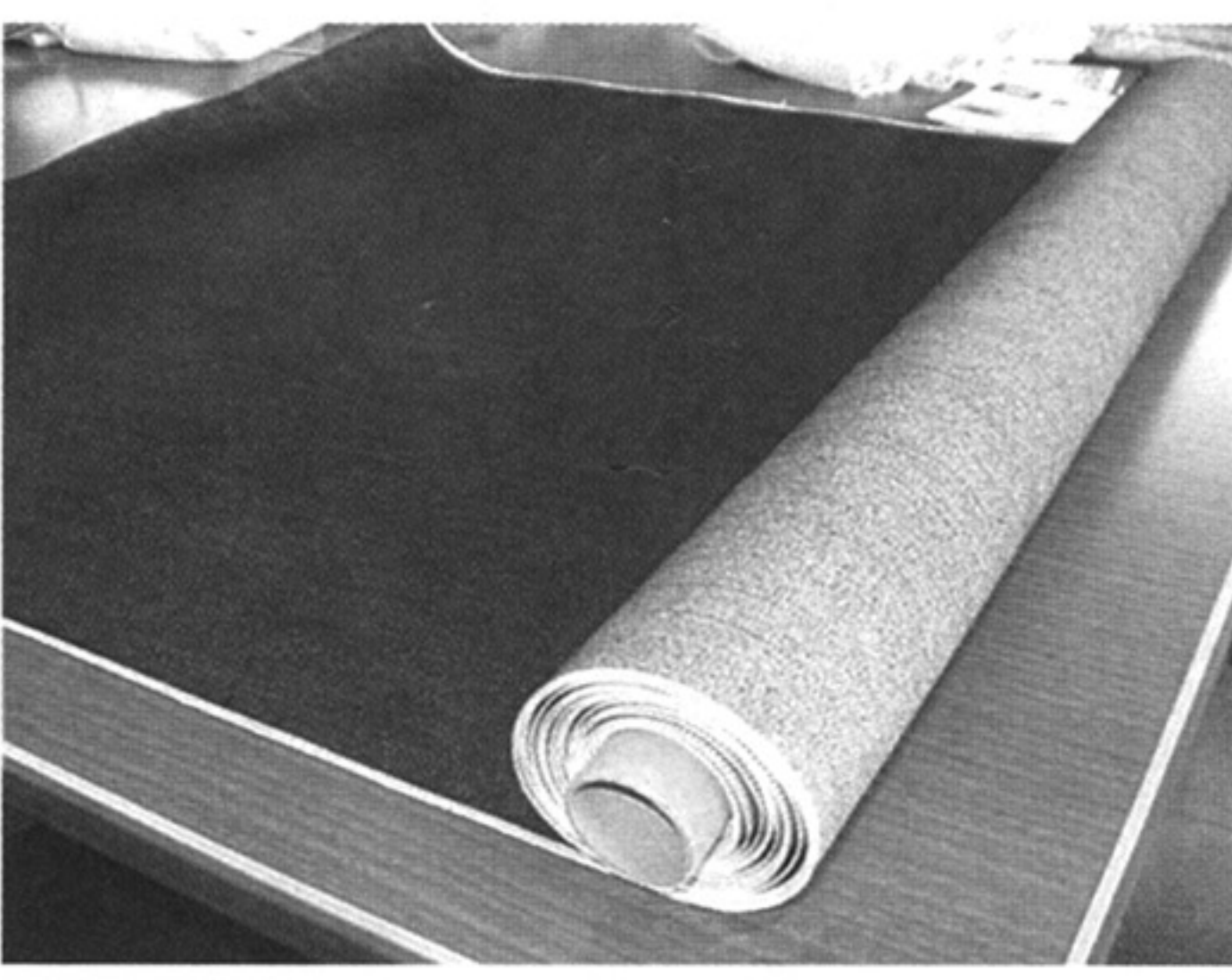


光成明浩課長



光成猛社長

水擦り製法は同社が約7年かけ開発した独自製法。製紙メーカーから仕入れた和紙をスリット状に緯糸に和紙糸を使った“和紙デニム”



ジーンズ演出

採用が本格化

に加工、これを水分を乾燥させずに、安定的に浸しながら撚りを掛ける手法で、糸は軽く、しかも和紙独特の柔らかさ、風合いがある。

昨年、地元織布企業の協力を得て初めて実用化へ向けてデニム開発に取り組んだ。緯糸に綿糸、緯糸に和紙糸を使って試織し、備後や岡山のジーンズアパレル、縫製工場に提案したところ、予想以上の関心を集めた。

ポリユーム商品化とは路線が異なるため、納入ロットは小さいが、同社によるとアパレル担当者との間で、ジーンズアイテムへ採用を検討する動きが積極化してきているという。

付加価値素材でありながらも、同社では「コストパフォーマンスも意識せざるを得なくなっている」（光成明浩・営業課長）と話し、今後はコスト抑制策を具体的に検

討、「和紙糸デニムとしてジーンズマーケットになじんでいかせたい」としている。世界的な環境意識が高

まりと同時に、ジーンズ向けテキスタイルの付加価値化がビジネスの最前線に台頭する中、同社は「環境対応、風合いの良さ、軽さなど和紙素材の持つ多面性を訴求している」（光成猛社長）と自信を示している。

このほか、広島県下の新興アパレルとの取り組みで和紙糸とウールや綿、シルクとを混ぜたものを素材に使用したショールも開発。製品は後染め加工などによって、アレンジを利かせ製品化を目指している。